平成１８年度甲子園監督研修報告

常任理事　寺澤　誠一

平成10年に始まり、今回で9回目となる甲子園監督研修が、本年も下記日程で行われた。新チーム結成間もない頃、事前の研修計画が詳細に立てられないまま現地入りし、大会運営の合間を縫って日本高野連の方に甲子園球場の施設・設備等の説明を受けるといった研修スタイルもそろそろ再考すべき時かと思われるが、次代を担う20代の若き指導者が全国レベルを肌で感じることができる、またとない機会であることは疑う余地もない。今回は津門中央公園野球場で如水館高校の練習見学中、宮崎部長にお話を伺ったり、日本高野連の井本亘主任に球場内の施設や設備の案内をしていただく中で、三塁ベンチに入る機会を得る等またとない体験をすることができた。近い将来、今回の研修参加者の中からこのベンチに座る監督が出ることを願うものである。

最後に、例年のことながら本研修実施にあたりご尽力いただいた朝日新聞笠原長野総局長、選手権大会の本部員としてお忙しい中、何かとお世話下さった奈良井常任理事を始め連盟関係者に深く感謝申し上げます。

1.　期　間

平成18年8月9日（水）～11日（金）　－2泊3日－

2.　場　所

阪神甲子園球場

津門中央公園野球場（練習会場）

3.　内　容

10日　試合視察　静岡商業　－　八幡商業

福知山成美　－　愛工大名電

11日　練習視察　如水館

試合視察　三　重　－　熊本工業

天　理　－　本　荘

南陽工業　－　駒大苫小牧

インタビュー・理学療法士サポート

球場施設・設備見学

12日　試合視察　青森山田　－　延岡学園

桐生第一　－　佐賀商業

4.　参加者

清水雄一（北信支部　北部）　柿沢章浩（東信支部　蓼科）

篠原俊介（南信支部　駒ヶ根工業）　小原国幸（中信支部　木曽山林）

両角亮介（本県連盟常任理事）　寺澤誠一（本県連盟常任理事）

甲子園研修に参加して

北部高校野球部監督　　清水雄一

甲子園　――　自分が高校球児の頃には、夢のまた夢の舞台であった。「高校野球をやるからには甲子園を目指さないと」と思っていたものの、「行けるわけないよな」というのが正直な当時の私の気持ちだった。だから大学生になって同期に甲子園に出た仲間がいると、うらやましいというより、尊敬のまなざしで見ていた。指導者という立場になり、甲子園研修に行かせて頂くことが決まってから、高校時代に夢見ていた舞台にいけるということで今回の研修を心待ちにしていた。

まず、甲子園に入る以前に大阪の暑さにびっくりした。肌にまとわりつくような湿気、吹き出てくる汗に、建物に入るたびにクーラー、扇風機を探してしまう始末だった。我々が滞在した３日間ともに日中は３５度を超える気温であった。そのため、特に動いていないのに宿舎に帰るとげっそり疲れてしまっていた。今回長野県代表で出場した、松代高校の１日の割り当て練習時間が２時間と新聞報道されたときに、「少ないな・・・」と感じたがこの暑さのなかでは２時間が限度だなと思った。長野県代表にはこの暑さも敵になるなと感じた。

球場に入ると、スタジアム全体からの地鳴りのような応援と歓声に圧倒された。私は今まで選抜甲子園は何度か観戦することはあったが、夏の甲子園は初めてであった。夏の甲子園は選抜とはまた一味違った雰囲気であり、選手の熱気、ファンの熱気、応援の熱気にあふれていた。当然ながらスタジアムは、１球１球に対し、ため息やどよめきが起きていた。このような場所でプレーできるのは本当に幸せなことだなと、目の前でプレーしている選手に対してうらやましさを感じた。それとともに、この舞台でプレーするには体力・技術はもちろん、精神力、言いかえればビビらない、「度胸」が必要であると認識した。

応援の雰囲気を感じてみようと秋田代表の本荘高校のアルプススタンドに入らせてもらった。アルプススタンドは応援の熱気も加わってさらに暑く感じた。その中で本荘高校の生徒は本当に一生懸命応援していた。応援に合わせてのダンス、選手一人一人への応援ソングもすべて暗記され一人として手を抜くことなく、すばらしい応援を見せていた。もし、自分の学校の生徒にあれだけの応援をされたら・・・と思うと感激で涙がこぼれそうだった。

普段は母校なんて意識したことはないだろうが、やはりこの舞台にでてくると母校、そして自分の郷土を意識する。甲子園は学校、郷土が一体となれるすばらしい場所だと思った。

試合を観戦して感じたこと

何気なくテレビを見ていると球速表示が出る。すると「この投手は１２０㌔か？このくらいなら県内にいくらでもいるな・・」なんて思ってしまうが、実際１日目の静岡商業と八幡商業の試合をバックネット裏の最前列で見せてもらうと、よくいう「球のキレ」すなわち、「初速と終速の差があまりない伸びのあるボール」を投げていることに驚いた。とくに静岡商業の大野投手は球速表示１２０㌔そこそこだか、はっきりいって、手元では１３５㌔くらいに感じるストレートを投げ込んでいた。他の投手に関しても同様であり、次の試合の愛工大名電の佐々木投手、福知山成美の駒谷投手のボールも球速表示以上にすばらしいボールであった。結局、この試合は福知山成美が下馬評を覆し勝利を収めたが、サイドハンドから、言い方は悪いが「ぶん投げて」１３５㌔のストレート、切れの鋭いスライダーを投げる駒谷投手には驚愕を覚えた。やはり、実際に試合を見ると違うなと思った。

また、注目の投手、駒大苫小牧の田中投手のボールはテレビでは、その日は調子が悪いといっていたようだが実際見ていると、すさまじく速いレベルであった。そして、特にスライダーは１３０㌔くらいで打者の手元で落ちるボールであり、打つことはもちろん、捕手が捕球することも困難に感じた。しかし、対戦相手の南陽工業はスライダーに空振りするものの、１４０㌔台のストレートを確実に打ち返しており、この辺の打者のレベルもあきらかに違っていた。打者は、スイングに無駄がなく、ストレートを待っていて変化球を見逃したときもボールを見逃す姿勢が崩されていなかった。

守備は県内の選手と比べて、捕る、投げる技術に関してはさほど遜色がないと思った。ただ、外野手の送球の正確さがすばらしかった。肩は強くないもののバックホーム時のボールはすべてワンバウンドでストライクだった。１点を大事にしてきた野球の延長に甲子園があると感じた。また、大きく違っていたのは、「守備で相手を攻める」というプレーであったと思う。具体的には、捕手のサインによる守備位置の変更、けん制球のタイミング、カバーリングの意識やミスした後の対処方法である。特に、ランナー２塁でのけん制球、また、ランナー１、２塁での１塁けん制などのタイミング、意思疎通がすばらしく甲子園に出てくるチームは、守備でも相手にプレッシャーをかけることができていた。

バックネット裏の最前列に座らせていただいたこともあり、各監督のベンチワーク、采配も声の届くところで見させていただいた。とくに印象にのこったのは愛工大名電高校の倉野監督であった。シートノックは、一般的なシートとは違い、投手がマウンドからボールを投げ、その傍らでノックをうち、外野はひたすら、バックホームで終わっていた。シートが終わると監督自ら大きな声を出し、選手を鼓舞していた。それにのせられ笑顔でプレーをする選手が多く、監督の人間性がチームに与える影響を改めて感じることができた。

また、甲子園常連のチームほど、リラックスしていて表情にも余裕があり、動作も機敏であった。今回の研修では、ベンチ内、控え室、室内練習場、クーリングダウン、記者会見の様子、なども見させていただいたが、地方大会とは違い甲子園独特のものが数多くあり、初出場高校はグランドでのプレー以外で非常に戸惑うことが多いだろうと予想できた。その辺のところで常連高校の監督、選手には余裕が感じられたのかなと思った。

最後に

今回このような機会を与えていただきありがとうございました。また、お忙しい中にも関わらず引率指導していただいた、寺澤先生、両角先生に感謝しております。甲子園にいって当たり前のことながら一番感じたことは、高校野球は裏方があって初めて成り立っているということでした。本部役員の奈良井先生にお話を聞くことができましたが、4 試合のときはAM5 時半には球場に入っていなくてはならず､終わるのは早くてもＰＭ７時半だとおっしゃっていました｡私が滞在したのは3日間だけでしたが、試合に出場する監督、選手が力を発揮できるように役員の方が奔走する姿を何度も見ました。私もシーズン中に研修にいくことができるのは留守中に北部高校の練習を見てくださる橋爪部長、松田顧問のおかげであると思っています。

感謝の気持ちを忘れないように、また今回の研修がいつの日か生きるように努力精進していきたいと思います。

第８８回全国高等学校選手権大会

甲子園研修レポート

長野県蓼科高等学校野球部監督
柿沢　章浩

＜日程＞　　８月９日（水）～１１日（金）

・８月　９日　甲子園球場到着　→　試合見学（八幡商－静岡商、愛工大名電－福知山成美）

・８月１０日　練習見学（如水館）　→　神社見学　→　試合見学（熊本工－三重、本荘－天理、南陽工－駒大苫小牧）→　試合後の選手見学　→　球場施設見学

・８月１１日　試合見学（延岡学園－青森山田）　→　甲子園球場出発

「甲子園はどんな所なんだろう・・・」　まったく知らない事に気づいた３日間でした。
私は、野球を始めた小学生の時から、もちろん指導者になった今でも甲子園に出場することを目標にしていますが、甲子園について、もっと言えば甲子園大会について何も知りませんでした。今回の甲子園研修に参加させて頂いたおかげで、多くのことを知り、学ぶことができたと思います。

まず、甲子園に着いて最初に感じたことは、とても暑いということです。こんなことは当たり前なのですが、その当たり前のことが本当に強く感じました。今、この場に蓼科の選手を連れてきて試合をやらせたら、やりたい、またはできるプレーの１割もできないのではないかと思います。どんなにチームのレベルを上げても、それを発揮できないのでは意味がありません。暑さへの対策、例えば夏でも厚着をして練習をしてみる、昼間の一番暑い時間に練習のピークを入れる、熱のこもった球場で練習をして球場に慣れる、サウナを利用して蒸し暑さに慣れるなど、実際にやっていく必要があると感じました。選手に、試合中プレーの邪魔になるものや障害になるものは何かと聞くと、『暑さ』と答える選手が多いので、積極的に取り入れていきたいと思います。

次に、試合日ではない選手達の行動が気になりました。偶然、松代高校の選手に会ったのですが、試合の翌日ということもあってか、自由行動をしていたように思います。もちろん他校の選手も自由行動をとっている姿が目につきました。ぎっちりとこちらで行動を管理してしまうと、身体的な疲労や精神的な疲労が溜まり、実際の試合で力を発揮できないのではないかと感じました。私は消極的な性格なので、「自由にしてよい」と言われてもどうしてよいのか分からなく、結局ずっと試合を見ているだけか、同じ場所から動けずに何もできないでいそうな気がします。甲子園に滞在する時間は長いので、リラックスをするためにも“自由な行動を積極的にとれる能力（こんな能力はないのかもしれませんが）”も大切だと感じました。遠征に行った先で、または合宿の時に経験させていきたいと思います。

球場に入ったときに感じたことは、球場の外壁からグラウンドまでが近かったことです。球場に入るとすぐにスタンドへ出ることができ、しかもすぐ近くにグラウンドが広がっていました。バックネット裏の客席が狭く、高くなっているのだと感じました。客席にいるとあまり意識しませんが、この壁のように高い観客席は、プレーをしている選手にとってかなりのプレッシャーなのではないかと思います。私はこのプレッシャーこそ、甲子園でプレーする上で最大の課題だと考えています。守備についている選手は、高い観客席の視線を正面に見ています。バッターが打ったボールは、カラフルな観客席の中を上がっていきます。一つ一つのプレーに多くの観客が反応し、大きな声援や歓声、ため息を漏らします。ミスをしたものなら、どれだけの視線や罵声を感じるでしょう。並大抵の精神力では打ち勝つことができません。今、さかんにメンタルトレーニングの重要性が取り上げられています。『いつも通り、練習でやった通り、最高のパフォーマンスを』ということを目標にしていますが、これこそまさにプレッシャーに打ち勝つために必要なことなのではないでしょうか。もちろん勝つためには、絶対的な技術力・思

考力・予測力が必要だと思います。ただ、その持っている力をどれだけ出せるかが、本番の試合には必要です。『１００』の力を持っていてもそれを『１０』しか出せないチームと、『５０』の力しかなくてもそれを『２０』出せるチーム。どちらが試合で勝てるかは分かりませんが、少なくとも私の所属している学校では、後者の能力を上げていきたいと思います（もちろん技術等のレベルアップも平行して行いますが)。

また、この対人からのプレッシャーは、自分から対人へ与えることによって引き起こされることもあるように思います。例えば、対戦相手を『敵』と考え、威圧し、馬鹿にする。これは相手にプレッシャーを与えているように感じますが､実はそれをすることによって､自分が恥ずかしいプレーをできない、無視されたときにムカつく、反撃されれば余計にムカついて周りが見えなくなるなど、逆に自分へのプレッシャーとなって返ってきます。よく「敵は対戦相手や審判ではなく自分自身だ」と言いますが、本当に強い、負けない、勝ち上がっていくチームほど、これを分かっているのだと思います。甲子園の試合では、相手を威圧したり、審判の判定に文句を言ったりしている姿を見ませんでした。いかに不必要なものなのかを再認識し、その能力よりも、自分を高める能力に力を入れていけるような選手を育てていきたいと思います。

試合後の選手を見させていただきました。インタビューの光景、トレーナーの指示でストレッチをしている光景など、テレビだけでは知らないところを見ることができたのは、とてもよい経験になりました。どんな状況の試合であっても、たとえ負けた後であっても体のケアをする。そこで野球人生が終わるわけではない、という想いが感じられました。これが地方大会であっても同じことが言えると思います。試合に勝っても負けても、試合日は特別、みたいな雰囲気で試合後のケアを怠っているときがよくあります。それで終わりではないので、そこを意識させていきたいと感じました。

ただ、私はそれ以上に試合後の選手を見ている時に感じたことがあります。それは、マスコミの人数です。ただでさえ狭いインタビュー空間なのに、どこに潜んでいたんだと思うくらいの取材陣が押し寄せていました。聞くところによると、試合前の室内練習場でも取材の時間があり、かなりの取材をうけるそうですが、質問されて、どれだけの選手がマトモな返答をできるのか不安に思いました。普段、自分の気持ちすらしっかり言えない選手では対応できません｡試合前のインタビューで圧倒され､緊張し、恥をかいた状態で試合に臨む。決して良い状態で試合に行けてはいないと思います。なので、このインタビューに慣れることも大事なのではないかと感じました。常に自分の気持ちを言う、カメラの前でマイクを向けられて抱負を言う。もっと言えば、みんなの前でパフォーマンスができる、わざと自分から恥をかけるといった能力を身に付けていく。そうなれば、インタビューされることで自分の気持ちが高まり気分が乗っていく、再びインタビューを受けたいと思い頑張れるように変わっていくことができる気がします。私が指導する選手たちにも、インタビューで自分を出せる、しいてはプレーでも自分の能力をアピールできるようにさせていきたいと思います。

私の考えていることは､『どうしたら選手が自分の高めた力を発揮できるのか』です。今回のレポートでも度々使っているのですが、それを追求し、ほんの少しでも『本番で力を発揮する』ことができるような指導をしていきたいと思っています。

最後に、今回の甲子園研修で一番感じたことは、大会全体の雰囲気がすべてにおいて感動できるということです。こんな大観衆の中で試合ができる、１球１球に日本中の人が注目している、そして何より自分の学校の仲間がみんなで応援に来てくれて精一杯の声や体で応援してくれることに鳥肌が立つくらい感動しました。蓼科高校の生徒があの応援席にいてあの応援をしてくれたら・・・涙がでるくらい嬉しいし、その中で試合ができることを誇らしく思えます。そんな気持ちを、指導している選手たちに味わわせてあげたい、そのための指導をしていかなければいけないと強く感じました。

支部を代表し、この研修に参加させて頂いたことをプラスにして、今後の指導に力を入れていきたいと思います。ありがとうございました。

監督研修レポート

駒ヶ根工業高校　篠原　俊介

今年度監督研修として、８月９日から11日までの３日間、寺沢・両角県高野連常任理事の引率のもと、阪神甲子園球場などへの視察を行いました。その内容や感想について、項目ごとにレポートしていこうと思います。

〇球場について

私自身は、甲子園球場といえばとても広い球場というイメージがありました。実際はとても広いのですが、外野にも広いスタンドがあり、意外とグラウンド内部が狭く感じました。ただ、地方大会で使用する球場と比べると、その規模は桁違いで、そのような中でプレーする選手たちがうらやましくてなりませんでした。また、プロ野球でも使用する九錠ということで、観客席がとても近く、選手と一体になって観戦することができるという感想を持ちました。

その中で、一番印象に残ったことが、アルプススタンドでの光景です。今回の研修の中で、アルプススタンドの中に入っての観戦もしたいと思っていましたが、実際にはいるとその熱気に圧倒されました。応援できている生徒は全員がたったまま応援し、地元の関係者と思われる人は声援を送り、卒業生と思われる人が選手を叱咤する。まさに学校が、地域が一体になってグラウンドで戦っている選手を後押ししているように思いました。この一体感が、甲子園のすごさではないかと思います。私自身、その学校を特に応援しているというわけではなかったですが、つい一緒になって応援してしまいました。野球を通して、そのような一体感を体験できるということは、とてもすばらしいことであり、いつか自分もそのような中で野球をしてみたいと強く感銘を受けました。

〇選手のプレーについて

よく甲子園では選手はある種の達成感を持って試合をしているといいます。地方大会では負ければ終わりというプレッシャーの中で試合をしているものの、甲子園では何か解放されてように野球をするのだそうです。しかし、実際に選手たちをみていて、私は少し違った印象を持ちました。いくら甲子園といえど、負ければ終わりです。選手たちは、目の前の試合への勝利を目指し、最大限の努力をしているように見えました。甲子園という大舞台で、自分たちの力を発揮して、勝利を目指そうとしている選手をみて、やはり高校野球はこういうものだと思いました。

さて、自分の指導している生徒と、甲子園で活躍する生徒と、何が一番異なるかということにも重点を置いて観戦しました。確かに、体格などはどうしても埋めようのない差があることは事実ですが、一番感じたことは一つのプレーの正確さです。単純に投げる・打

つ・捕るといった動作がとにかく正確だということです。その正確さがあるからこそ、甲子園に出場するくらいの選手は、すばらしいプレーもできるのだろうということを強く感じました。これから自分が指導する生徒たちが、より正確なプレーをするためには、どのような練習をしていくべきなのか、その点を指導者としての自分の課題にしていこうと思いました。

今回実際に甲子園でプレーする選手の実力を直にみることができました。このことは、指導者である私にとってはとても良い経験ができたと思います。この甲子園で戦う選手の技術が自分の中での基準となってくると思います。また、テレビ等でみるよりも、実際にみた方が、選手もスピード感やキレがあり、とても良い参考になりました。

〇選手の体調管理について

甲子園での試合は、多くの学校が自分の住んでいるところを離れて、長期間にわたって生活をしながら試合をこなしていかなくてはなりません。試合をするときに最高の体調で臨むために、各校とも様々な工夫をしているようでした。夏の甲子園の最大の難関といえばなんといってもその暑さだと思います。実際に試合を観戦しているだけでも水分をしっかりとっておかないと熱中症にもかかってしまうような暑さでした。その中で今回は広島県代表の如水館高校の練習を見学しました。まず甲子園の大会期間の練習といえば、会場が少ないために１日２時間までしかできないわけです。しかし、如水館高校は１時間も練習すると、まだ会場を使用できる時間にもかかわらず、終了してしまいました。理由は、とにかくその暑さの中なので、とにかく練習は調整であって、疲労を残すようなことは絶対にしないということでした。私自身、２時間では少ないと思いましたが、大会中についてはあくまで調整であり、その以前にやることは全てやってしまった結果だと思い、とても感心させられました。また、甲子園では試合終了後に、専属のトレーナーのもとでクールダウンを行っていました。これは全ての出場校が行うものだそうで、全身の疲労回復の補助だということなので、取り入れが可能なものについては、積極的に自分のチームでも導入していこうと思いました。

〇まとめ

今回は運良く、選手の通る通路や、甲子園球場のベンチの中まで見ることができました。今まではテレビの中でしかみることの無かったところに実際に足を踏み入れることによって、夢のような存在を直に体験することができました。甲子園といえば多くのマスコミなどの注目を浴び、時には精神的に大きなダメージを負うこともあると思います。しかし、一回くるともう一回きたくなるものです。今回の研修で一番感じたことは、ぜひとも自分で選手を率いて、甲子園にきたいという気持ちが一気に高くなったことです。次は自分が研修ではなく実際に甲子園に来たいんだ、という気持ちを再確認できたとてもすばらしい研修でした。

甲子園研修報告書

木曽山林高等学校野球部監督　　小原　国幸

試合観戦感想

Ⅰ　守備面

①投手

すべての投手に共通している面として、外角への制球力が良いこと、カウント、三振を取れる変化球を持っていること（低めにコントロール）、１３０ｋｍを超える伸びのある（キレのある）ストレートを持っていること、があげられる。福知山成美高校駒谷君の素晴らしい制球力、三重高校梅村君の伸びのあるストレート、駒大苫小牧田中君の三振を取るスライダー（ストレートはすべてシュート回転して最悪の調子だった）は、特に目についた。

ただ、今大会は打撃のレベルが非常に高く、内角への制球力がなければ、球威の落ちた後半に痛打され、序盤の大量リードを最後まで守ることのできないという試合が目立った。試合の流れに飲み込まれてしまう心理状態も、本来の投球をすることを妨げている感じがした。

②捕手

肩は強く、動作は正確で機敏である。捕手からの指示で、場面に応じた守備体型が徹底されていた。捕手からのサインかはわからないが二塁牽制が非常にうまいチームが多かった。その他サインプレーはなかった。

③野手

内野手は、リズムよく、足が機敏に動いていた。消極的な待つようなプレーはなく、積極的なプレー、はつらつとしたプレーができていた。失策はグラブ裁きのいい加減なものか、足が止まってしまったときの送球ミスがほとんどであった。

外野手については、肩が強く、守備範囲も広かった。ポジショニングについてはどのチームもやや深め、一球一球考えて思い切った守備位置をとるチームもあった。カバープレーも徹底され、常に全力疾走でカバーを怠ったことによって傷口が広がったという場面は一つもなかった。

Ⅱ　攻撃面

打撃に関してはとにかくすごいの一言。打球がピンポン球のように飛んでいった。中途半端なバッティングをする者はおらず、思いっきりの良いシャープなスイング（決してスイングが大きすぎるわけではない）、最後まで振り抜こうという意識が感じられた。投手の失投は逃さず、長打で一挙に形勢逆転という場面が目立った。

すごい打撃に隠れたようになってしまったが、送りバントをきちんと決めているチーム

は試合を有利に進めていた。捕手の肩の強さ、守備力の高さから、エンドラン、盗塁はなかなか決まる場面がなかった。

Ⅲ　走塁

常に次の塁を狙う積極的な走塁が目立った。躊躇したり、判断ミスをしたりということは少なかった。全員が相手チームプレッシャーをかけられるような走塁をしていた。

その他

シートノック

７分という短い時間の中で、効率の良いノックをしていた。内外野同時のフライ捕球をたくさん打って、風、スタンドへの距離などを確認しているチームが多かった。

試合前後

報道とのからみがあり、十分なアップをすることができない（時間も少なく、キャッチボールでは遠投ができない)。地方大会とは違うアップを強いられるので、気持ちと体のつくり方が難しいと感じた。

試合後は、記者会見（２３分）に続いて、理学療法士によるクーリングダウンが行われていた。投手は、マンツーマンで肩、肘、腰、下半身と念入りに行われていた。その他の選手は、下半身中心のストレッチを行っていた。レントゲン室の完備も含めて、選手の健康面に対しては細心の注意が払われていると感じた。

練習

如水館高校の練習を見学させてもらった。調整ということで、バッティングを中心に個人練習を行っていた。グラブさばき等で雑なプレーをしている選手もいたが、各個人の能力の高さには驚いた。

まとめ

大会役員の奈良井先生はじめ高野連の方のご配慮により、甲子園内部まで見学させて頂き、試合前の選手の動き、試合中のベンチからの視界、理学療法士による試合後のクーリングダウンの指導など、大変勉強になりました。

甲子園というところは、私が想像していた以上にものすごい数（人）のサポートがあって成り立っている素晴らしい舞台だと感じました。そして、この素晴らしい甲子園という大舞台にいつか立ってみたい、そういう気持ちになりました。

今回の甲子園研修に参加させて頂き、大変感謝しております。独特の雰囲気をもった甲子園の中で、高いレベルの試合を観戦できたことは、今後の指導において大きなプラスになると思います。ありがとうございました。